

不登校児への早期対処 VIII

寺 田 道 夫

要約

欧米諸国において不登校問題は一世紀以上に渡り学校教育及び心理療法の重要課題の1つと見なされてきた。日本では1960年前後に心理療法の対象として取り上げられるようになった。しかし当時は一握りの事例であり、学校も家庭も、そして社会もほとんど関心を寄せてはいなかった。それから50年の歳月を経て、小中学校の不登校は12万人以上と横ばい状態にある。それゆえ、文科省も不登校問題を教育の最重要課題として位置づけるようになってきた。一方、欧米諸国の臨床事例に基づく先行研究を経て構築された多くの知見や技法が日本に流入しつつある今日、学校は不登校問題の理解と対処及び予防をするに当たり一体何ができるのか。当面、何をしなければならないのかという現実的課題に直面していると言えよう。そこで、今回の論文では、不登校問題の現状を取り上げると共に、今一度、学校場面において基本的に何を重要視し、如何なる方略をなし得ることが不登校問題の軽減に繋がるかを論じることにした。

はじめに

毎年、8月に文科省が公表する小中学校の不登校(判定基準: 病気や明白な理由以外で年間30日以上欠席)の子どもはここ数年間12万人台に留まり、数値に対するニュースバリューはやや低下しつつあると言えよう。不登校発生の実態を見れば、学年ごとの出現率や主なきっかけについては毎年同じような傾向が見られるという現象が起きている(学校基本調査結果, 2008-2010)。また、近年は高校生の不登校や中途退学の実態も浮き彫りにされ、小中高等学校における不登校問題の深刻さが増している。さらに、不登校問題に対する効果的施策が見えない故に、不登校を今日の日本では学校及び家庭、また社会的にも至極当然の現象として容認する風潮があることも事実である。

他方では、子どもが学校への登校をしぶり始め、不登校状態が長期化することで派生する子どもの再登校や学級復帰の困難さ、家庭内の混乱状態など様々な二次的問題の深刻さを憂い、早期介入による学校復帰の重要性が、多くの研究者や実践家により指摘されている。

特に不登校の子どもと学校との関係で派生する二次的問題の一例を上げれば以下の事項などがある。

- a. 学校に対する不安が一層強まり汎化する
- b. 家庭で居心地がよくなり外出等嫌なことを回避する
- c. 学習の遅れや対人関係に対する劣等感が強まる
- d. 学習意欲が次第に低下して学習を意図的に回避する
- e. 学校的话题に敏感となり回避や暴力等に対応する

子どものこのような行動を目の当たりにした親や教師は頭ごなしに「まったくやる気がない」と決めつける。しかし、子どもたちは本当に学校で学ぶことに意欲が全くないのだろうか。子どもに学習や進路についてたずねてみると、「ぜひ学校で勉強したいと思ってはいる。でも、再登校して元の学級に入り、学級の他の子とそれをするに今はとても自信がない」と答える子どもは多い。

それゆえ、子どもに登校意欲や学習意欲があるものの、結果的に不登校の開始以降に派生する二次的利得(Klein, E., 1949)など様々な二次的問題のために、焦る気持ちをどうすることもできず終日TVやゲームに釘付けになったり、家庭内の居心地の悪さから昼夜逆転の生活スタイルをあえて取ったりしながら家庭にそのまま居続けることになる(寺田, 1994a; 寺田, 2005a)。そのため、筆者は早期の学校復帰を目的とした対処を積極的に導入する必要があると考える立場で相談に応じてきた。

しかしながら、早期学校復帰を提唱する立場に否定的であったり、早期の学校復帰のその後の危険性を危惧したりする考え方は、精神科医や臨床心理士など不登校問題に長年対応してきた心の専門家の間にはいまだ根深くあるのも事実であろう(Blagg, N., 1987)。

また、不登校問題の研究史を辿れば、不登校に関する事例報告や調査研究の多くが、家族機能(Partridge, J. M., 1939; Bernstein, G. A., Svingen, P. H., & Garfinkel, B. D., 1990 など)や家族の心理力動的要因(Johnson, A. M., Falstein, E. I., Szurec, S. A., 1941 など)及び学校要因(Chazan, M., 1962; 小野, 1995 など)に着目した理解と対処に力点が置かれてきたことがわかる。さらに不登校の発生要因として、思春期・青年期にみられる神経症や鬱、統合失調症、不安障害、パニック障害、トラウマ、発達障害など様々な心の病や脳の機能障害が背

景にあることを強調する立場も見られる (Burke,A.E.,& Silverman,W.K.,1987; 寺田,2010a など)。

学校場面で不登校事例にかかわる教師の場合、これらの諸要因に対する専門的知識は浅く、スクールカウンセラー (以後 SC として表記) や精神科医等から目の前の不登校事例の発生要因や障害について説明を受けたとしても理解に戸惑うのが一般的である。しかし、それらの複雑な要因に配慮した形で事例に対処することの重要性が様々な分野から示唆されつつある。それだけに、学校は対処に戸惑いや不安が生じる。

なお近年、不登校の発生の抑止を意図した登校促進要因の解明に関する研究 (石橋、2005; 北区不登校対策検討委員会、2006; 青田、2006; 伊藤秀樹、2006; 浅川、2008; 怡婷,2008; 寺田,2008) や、本格的な不登校が始まる以前の前兆に着目した対処法の研究 (Tambirajah,K.J.,Grandison,K.J.,&Hayes,L.,2008) も見られとても興味深い。一方、筆者の対処事例に限らず、文科省等の学校基本調査結果 (2007～2010) から、学習活動や友人・教師との関係のつまづきなど様々な学校内の出来事を契機に登校意欲が減退し、不登校が始まることが多いことも示唆されている。そのため、学校としては、不登校の早期発見と対処及び SC や他の専門機関へ迅速なリファールを行うことと併せて、登校意欲や学習意欲さらに学校生活に対する満足度の視点から増え続ける不登校問題の予防的・開発的対処に取り組むことが喫緊の課題となると言えよう。

筆者は長年、家族の心理的力動要因及び学校要因という2つの要因に着目することの重要性を考慮すると共に、不登校状態に陥った子どもの不安や葛藤と同時に登校意欲の発現に着目することの重要性を力説してきた。その理由として、不登校問題の解消を目指すとするれば、登校意欲と学校要因との関連性を明らかにすることで、不登校予備軍と言われる子どもたちの早期発見と予防的対処、さらに、不登校の生起を未然に防ぐための学級・学校の教育環境づくりが促進されるのではないかと考えるからである。

また、不登校の子どもや親、そして学校内の教職員等の心理的力動の理解を基に個々の事例に対処しようとしてきた。特に本来、子どもというものは学校場面で仲間と共に「生活したい」「学校で学びたい」という欲求を持つ存在であるという人間観に立ち、不登校の子ども「学校に行きたいけれど、行きたくない」という葛藤状態の前者に着目し対処してきた。それゆえ、不登校の子ども内にある登校意欲の発現を促すための早期対処をすることで、派生する深刻な二次的問題を軽減または回

避し、子ども自らが再登校や学級復帰といった現実と直面することができるのではないかと考えるに至った (寺田,東心、1994-2007)。

今一つ、筆者がこれまで紀要の中でほとんど取り上げてこなかったテーマに目を向けることは、今後の不登校の理解と対処法を啓発する上で必要なことであると考え。そのテーマとは、学校側に求められる不登校開始の直前及び直後の学校としての対応上の課題とその解決のための方途に関するものである。

そこで本論文では、筆者が初めて不登校問題に正対した当時の対処法の記録及び文科省の不登校問題に関する実態調査結果などを基に、学校側の不登校問題に関する理解の現状と、より望まれる理解の仕方及び予防も含めた対処法の在り方について述べることにする。

I 不登校問題への学校の対応

1. 不登校の実態に対する学校の認識と対応

①きっかけや原因についての認識

文科省 (当時は文部省) は登校拒否問題が深刻化し始めた 1993 年 11 月 29 日に学校不適応対策全国連絡協議会を開催した。その会でテーマとなった今日の不登校問題への理解や対処法を改めて見直すための鍵となる興味深い調査結果を報告している (内外教育、1993)。

調査は全国十府県及び一政令指定都市より選定された小中 62 校の学校、保護者及び不登校の子どもを対象に実施され、三者の間に不登校に対する認識のズレが見られることを指摘している。

例えば、小学生の「不登校のきっかけ」について見れば、学校は主要なものとして「親子関係」(19%)、「家庭環境の変化」(16%)の2項目を上げている。一方、保護者は「本人」(30%)、「友人関係」(9%)を強調している。当の子どもたちは、「本人」(22%)、「友人関係」(19%)にそれぞれ原因を帰属させている。「教師との関係」について見てみると、学校(2%)、保護者(5%)、子ども(6%)とそれぞれの間に微妙なズレがあることが分かる。さらに「影響度」について見れば、学校は「家庭生活」(43%)、保護者は「本人の問題」(34%)、子どもは「学校生活」(45%)というように明らかに三者の認識に大きなズレがある。

中学校の結果では、「不登校のきっかけ」として、「友人関係」については、学校(17%)、保護者(20%)。「本人」は子ども(28%)というように小学生とは大きな違いがあることが分かる。

全体的には、学校は「家庭生活」にきっかけを帰属し(27%)、保護者と子どもは「本人」に帰属する(26%,37%)傾向が見られる。

さらに具体的記述内容についても三者の間に認識の大きなズレがみられることを指摘している。

学校

- ・親が十分その役割を果たしていない
- ・母親の子離れ、子の親離れができていない
- ・父親が子どものことに無関心
- ・母親は本人に干渉すぎ
- ・本人の自立心が欠如
- ・いじめの対象
- ・級友から悪口、いやみを言われる

保護者

- ・本人の気が小さい
- ・プレッシャーを感じると行けなくなる
- ・学校へ行っても一人でいることが多い
- ・他人の前では自分自身が出せなかった
- ・友人からいたずらされたり、悪口を言われたりした
- ・学校が面白くない
- ・勉強が難しい、分からない
- ・友人がいない
- ・家でごろごろしていた方が楽
- ・友達にいじめられる
- ・悪口を言われたり、からかわれたりする
- ・勉強が分からなかったり宿題を忘れたりすると、先生はすぐ怒るので嫌だ

即ち、学校は家庭の家族機能の不全さや、子どもの性格特性及びいじめの対象となりやすいことを上げている。保護者は、子どもの性格特性に伴う学校場面の対人的弱さを強調している。一方、子ども自身は、学習意欲の喪失や学校での孤立感及び級友や教師によるいじめや叱責に伴う学校回避の気持ちがあることを示している。

これらの調査結果から「学校、保護者の不登校の子どもに対する認識と当の子ども自身の認識には大きなズレが見られ、この認識のズレは、そのまま学校や保護者の子どもへの理解や対応に影響を及ぼすことになる」と言えよう。

特に子どもの側に着目すれば、不登校状態に陥る時、子どもは学習意欲の喪失や孤立感を強く抱いていることが予測される。しかし、学校や相談機関は、子どものこのような側面に余り着目せず、第1に家族機能の問題や子どもの自我の未発達の問題に目を向けてきた一面は無いだろうか。

この調査結果が公表されて以後、小中学校の不登校の子ども数は大幅に増加し、1996年度からはSCの配置を開始するなど様々な施策が国や各地方自治体においても推進されることになった。しかしながら、不登校問

題はいまだに一向に沈静化する兆しが見えないという現実がある。一体どこに問題解決の糸口があるのだろうか。ここにおいて、今一度、学校において何ができるかを問うことが大切であると考えらる。

なお、2010年8月に公表された前年度の不登校の数は小中で122,000人とやや減少しつつあるものの文科省は「12万人という数字は依然高水準であり憂慮している。教育上の課題があると認識しており、トレンドとして減少に転じたとは考えていない」というように認識している。即ち、不登校問題はBlagg(1987)が示唆した「教育の課題」というとらえ方は、今や日本においても同様であるといえよう。

図1は2009年度の小中学校の不登校のきっかけに関する学校基本調査結果である。やはり今日においても学校は不登校が始まる第1のきっかけとして「本人の問題」を小中学校共に40%以上の値で上げている。尚、マスコミ紙上でしばしば取り上げられる「いじめ」と「教職員との関係」は2～3%台となっていることがわかる。

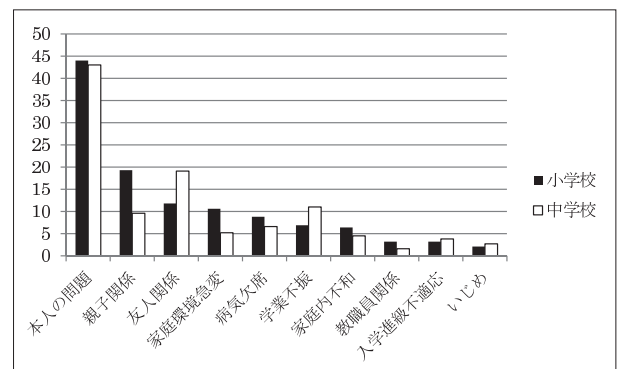


図1. 不登校の主なきっかけ(%) (学校基本調査、2010)

②不登校の開始時期

不登校事例数として報告されている各都道府県の実態調査の報告を基にどのような事例がいくつある相談機関や学校で対処されてきたかをかつて調査したことがある(寺田・堀江・中端・杉原, 2007)。一部の都道府県の情報(1983～2002、2都道府県、計202事例)ではあるが、来所事例の学年別の分布は図2～図4のようであった。小学校では入学直後の1年生及び思春期の時期と重なる中学年にピークがある。さらに、明らかに中学生の不登校の相談事例件数が他を圧倒し、開始時期の学年は中1で最も多く、しかも1学期から2学期に顕著に出現することがわかる。

この結果は、不登校または登校拒否のピークに関する以下の先行研究の結果ともほぼ合致していることが示唆される。

Hersov(1985): 5～7歳、11歳、14歳、またそれ

より年長で、かなり流行があることを示唆。大まかに言って初期の学校教育、学校の変化（入学、進級）、そして、義務教育の終わり近くにそれぞれが対応している。

Last, C.G., & Strauss, C.C. (1990)：不安障害と診断された 63 名の登校拒否者についての研究の中で、登校拒否（不登校）との関わりがみられる子どもたちの年齢の範囲は、10 歳あたりで上昇がみられ、13～15 歳がピークとなることを報告。

他の研究者：登校拒否（不登校）は、児童初期や中期と比例して、また、青年期前期と青年でかなり高い発生率であることを示唆 (Kearney, Eisen, & Silverman, 1995; Last, 1992)。

文部科学省の学校基本調査速報 (2010)：不登校児童生徒数は学年が進むにつれて増加し、特に小学校 6 年から中学校 1 年にかけては約 3 倍近くに跳ね上がり、中学校 2 年でも大幅な増加が続くという特徴がある。

これらの結果を見ると、不登校があたかも中学校で顕著な問題であるかのような印象を受ける。しかし、国立教育政策研究所生徒指導研究センターの調査結果 (2002 年 12 月) によれば

：中学 1 年生で不登校であった子どもの半数は、すでに小学校時代に何らかの形で学校を長期欠席していたことが分かった。逆に、小学校時代にあまり休まなかったにも関わらず、中学 1 年生で不登校になった子どもは、全体の約 25% に留まっている。

以上のことから、不登校は中学校で急増するというだけでなく、小学校で潜在的にあった問題が中学校になって不登校という形で顕現化すると考えることがより適切であると言える。

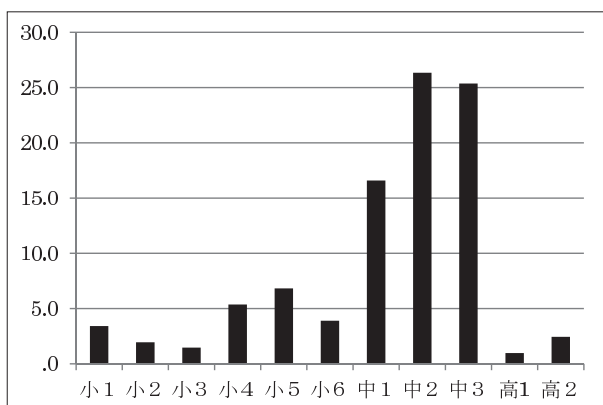


図 2. 来所時の所属学年 (%) (寺田ら, 2009)

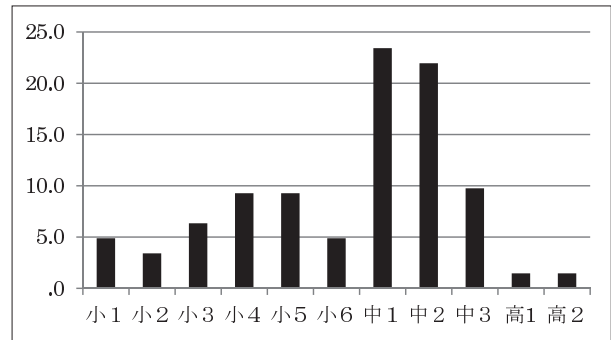


図 3. 来所時の所属学年 (%) (寺田ら, 2009)

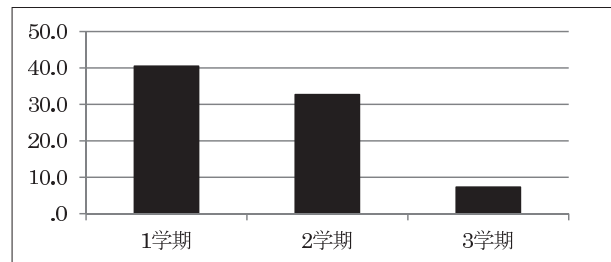


図 4. 不登校開始の学期 (%) (寺田ら, 2009)

さらに、これらの結果から示唆されることであるが、小学校高学年から中学校 3 学年の間に不登校となる子どもが圧倒的に多いという現実を学校側があるがままに受け止めることによって、不登校問題の発生を未然に防いだり、二次的問題の派生に伴う家庭での閉じこもり状態の長期化を抑制したりすることが可能となると考える。

学期別に不登校の開始時期を見た場合、明らかに 1 学期及び 2 学期が 7 割以上を占めており、保育園・幼稚園から小学校、小学校から中学校に進学する時期における学校全体としての不登校の理解と早期対処及び予防的対処について全教職員が共通理解を図ることが不登校問題の解決に向けた最重要課題であることが示唆される (寺田, 2009)。

③不登校事例への担任の対応の現状

実際、学級の子どもが学期の途中で不登校状態となった場合、学級担任（以後、‘担任’）による抱え込み状態となることは多い。特に疾病による欠席なのか、それとも不登校の前兆なのかを見極めることは難しく、結局、親からの電話による届け出のままに受け止めざるを得ないのが実際である。しかし、出席簿に記載された欠席日数と同一の理由が一週間以上も続くとなると本物の不登校ということになる。近年は市町村の教育委員会単位で各学校の 1 週間以上の欠席者を報告する体制が整えられており、早期に不登校の実態を市町村教委である程度掌握できるようになってきた。

子どもが不登校になった時、親の狼狽や不安はとても大きい。そのため、親が級友や担任の対応の仕方に我が子の不登校の原因を帰属する傾向は根強い。それゆえ、最近では管理職や教育委員会に担任の交替や転校・区域外通学の申請を直接訴える事例も見られ、学校と親とが直接衝突することもしばしば起きている。また、子どもの不登校を理由とした欠席が長引けば、親も内心心配となり、担任に却って相談しづらくなるのも当然のことである。

このような好ましくない状況が一度生まれると、担任が子どもと会うために家庭訪問したとしても、親は勿論のこと当の子どもに会うことはできず、次第に足は遠のかざるを得なくなる。親の方としてもあれほど足繁く通っていた担任が次第に疎遠となることに対して失望感や見放されたことへの不安感が増し、結果として双方が関係の修復を何もしないままただ時間だけが経つ。

もちろん、担任の中には、学習や学校行事などの催しもの等の案内プリント類を、善意から級友に届けさせたり、意図的に遊びに行かせたりすることもある。しかし、その結果、ますますそれを回避する不登校の子どももいる。

それゆえ、担任のこのような対応が必ずしも不登校の子どもや親にとって全てがプラスとはならないことを十分知った上で意図的働きかけをすることが求められる。

以下は親が語った学校側の対応にネガティブな感情を持つ内容の一例である（寺田,2001）。

- a. 担任や学校からの「呼び出し相談」という形態を取られることがつらい
- b. 相談場面に管理職を始め複数の先生方が同席され‘責められる’感じがする
- c. 多くの場合、校長室や会議室などで相談するが、かえって緊張や不安が高まる
- d. 子どもの不登校の原因を第1に学校以外に帰属されることが不満である
- e. 一旦、子どもが不登校状態となると担任の関わり方が急に減る
- f. 頻繁に家庭訪問されるので、親も子どもも戸惑ってしまう
- g. 先生方が訪問された後、子どもがとても不機嫌となる
- h. たまたま学校に行き教室を除いたら子どもの机が物置場になっていて耐えられなかった
- i. せっかく久しぶりに子どもが登校できたのに、先生方に‘即、教室へ’という焦りが見られる
- j. 子どもが相談室にいと、学級の子どもが引っ張りに来る

ここに述べられた親のことばは、あくまで親の目から見た学校の対応に対する不安や不満の一部であり、子どもの気持ちとはやや異なる場合もある。しかし、学校側の対応について子どもや親がどのようにとらえているかを理解することは、学校がより望ましい不登校の対処を行うための大前提となることは言うまでもない。

そのため、不登校の子どもや親に直接対応することが多い担任を孤立させない校内の相談体制の確立が重要な課題となる。

④見逃される不登校開始の前兆

一旦、子どもが顕著な身体症状を示したり、断続的な遅刻・早退、そして完全に登校を拒否する形での欠席状態となっても、そのまま放置されたり学校が試行錯誤的に対応し続けたりすることが一般的である。それ故、不登校開始直後から医療機関や相談機関に不登校の相談事例が持ち込まれるまでにかなりの日数がかかることが多い。

寺田ら(2009)は、校内の相談担当者や相談機関で対処された202件の不登校事例の内、発生時期から対処開始時期までの期間が明確に記述されていた127件について、本格的な相談が始まるまでにどれほどの期間があったかを調べた。その結果から、来談までにかなりの散らばりが見られ、1ヶ月程度が最も多く、後は4ヶ月単位で次第に減り、1年後に再び第2のピークがあることがわかる。いずれにしても医療機関や相談機関に不登校の相談事例が持ち込まれるまでに多くの日数がかかっていることになる。

もちろん、ごく普段通りに登校したり学校で学習や生活をしたりする場合でも、不登校開始に繋がる兆しは実に多く見られる。例えば、それらは微熱、時折の頭痛や腹痛、下痢・嘔吐だけでは無く、発汗や手足のしびれ、目眩や立ち眩みなど様々な身体症状として表れる(Tambirajahaら,2008)。しかしこれらの前兆は一時的なものとして親や教師が軽く扱うことはごく当たり前のことである。

行動面では、これまではとてもまじめな学習への取り組みをしていた子どもが、ある日突然、教室で授業中にぼんやりしたりノートの空白にアニメのキャラクターを書いたりするなど他事が多くなり始め、自分の周囲の人に学習以外のことで話しかけたり立ち歩いたりする。また、急に元気の無さが目立ったり、級友との会話が減ったりする。逆に多弁になったり大笑いしたりするなどハイテンションの状態になることもある。これらの行動面の前兆も教師はそれほど気にせずそのまま放置されるこ

とが多いと言えよう。

さらに、学習意欲の喪失に伴う成績低下、級友や教師に対する過剰な依存や反抗といった面が多く見られ、教室に居ることが心理的にも耐えられなくなり、授業中に突然立ち上がり、教室を飛び出してトイレや保健室に行くことが頻繁となる。このような不登校の前兆は、上述の場合と異なり親や教師にとりとても気になる言動であり、厳格な対応や指導を繰り返すことで、一層、エスカレートし、教室や学校で子どもの居場所が奪われることになる。

以上のような様々な不安定な身体症状や言動の延長として、遅刻や早退が頻繁に繰り返されるようになると、ようやく担任や親が「もしかして不登校の始まりではないか」とその前兆に気づき始める。もちろん、これらの身体症状や言動が即、そのまま全て不登校開始に結びつくとは限らない。ただ、ここに至るまでに実に多くの不登校開始の兆しが見られるわけであるが、不幸なことに学校側も家庭側も日常生活の連続として「ごく当たり前のこと」とか「思春期や青年期に多く見られる一種の反抗」と軽く受け取り、見過ごしてしまうのである。

不登校の前兆は家庭場面でも多く見られることはいうまでもない。子どもの一日の家庭生活を例に挙げれば、朝、寝起きが悪く、起きてきても不機嫌な表情が見られる。着替えや登校の用意が緩慢となり、どこことなく元気がない。「気持ちが悪い」「頭や腹が痛い」といってトイレに入ったままなかなか出てこなかったり、嘔吐をしようになったりする。理由を親が問い詰めれば、「友達にいじめられた」「クラスが嫌」「先生がえこひいきする」などさまざまな口実を語ることもある。さらに執拗に理由を問い詰めたり矢継ぎ早に登校を強いれば、帰宅しても無口になったり、家族との会話を避けるかのように食事時間以外は自分の部屋に入ったままの状態が続くことも頻繁となる（参照 吉村,1988）。

いずれにせよ、不登校開始の前兆は、学校と家庭の両方の場面で見られることが多い。最初は単発的であったり、一過性のものであったりする。しかし、それらの兆しを周囲の人たちが見逃せば、益々、過度となり、最終的に多方面でその兆しが顕現化し、ようやく周囲の人たちの目にもはっきりと映ることになる（図5参照）。

不登校の開始までのプロセスをこのように身体症状や様々な言動を基に述べることで、学校と家庭とが子どもの不登校の兆しに気づき、早期にかかわることがいかに大切であるかが分かる。

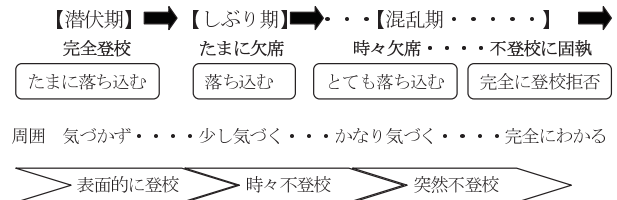


図5. 不登校開始前後のプロセスと周囲の気づき度 (Tambirajaha,2008; 寺田,2009)

2. 校内の相談体制の構築

①相談体制を巡る課題と対応

不登校問題に限らず、学校は心身に様々な悩みを持った子どもたちが日々、学習や生活をしている場でもある。それゆえ、問題行動の理解と対処法について教職員相互の共通理解を図ることが何よりも不可欠である。ここでは、学校の相談体制に焦点を当てて不登校に対する共通理解と基本的対処法について述べる。

高校ではかなり以前から生徒指導部や教育相談等が校内で明確な位置づけにあり、不登校を初め様々な不適応生徒への組織的対応がなされてきた。小中学校ではそれらの部会や委員会はまだまだ十分に機能しているとはいえない。近年まで中学校では生徒指導部が反社会的問題に対し積極的な対応をしてきた。教育相談はその傘下に位置づけられたり、さらに小学校では、全教職員が参加したりする形で行われることが多い。

幸いにも公立中学校にスクールカウンセラー（以後SC）制度が導入されることによって、不登校やいじめを中心とした心の問題を解決するためこれまでとは異なった教育相談にかかわる組織が明確に位置づけられる学校体制が生まれてきた。しかし、小学校においては教職員数も限られ、SCの配置事業はまだ始まったばかりであり、中学校や高校の域には達していないのが実情である。

筆者がかつて不登校問題解消のために「登校拒否担当加配教員」として配置された中学校も、当時、まだSC制度が導入される直前であり、教育相談上の問題は、やはり生徒指導部の中で取り上げられる議題の1つに過ぎなかった。このような位置づけの中で、不登校問題に対していかに組織的に対処するかが喫緊の課題であった。

従来の相談室は、子どもたちにとって問題行動を起こした場合の「取調室」のイメージがあった。そこで、安心して心の悩みを打ち明け、相談できる場所であることを印象づける必要があった。部屋は秘密を保持されることを前提に外部から見られないことや、いつでも出入りができる場所にあることが大切である。一般的には最初に職員室や教室・特別教室ありきといった発想で設計図が作られ、空いた部屋がその他の部屋として割り当てら

れることが多い。そのため、相談室はあくまで二の次の空間に配置されることになる。さらに近年、全国の公立小学校にも少しずつSCが配置されるようになったが、相談室すらなく、いわゆる‘空き教室’がそのまま仮の相談室として当てられる学校が多いのが実情である。

このような現状を考えた時、当時、筆者に一任された相談室は、不登校事例の相談に従事する上で実に機能的であったと言える。

相談室で実際に不登校事例の対処をした時、子どもたちは他の子どもたちにけして見られることなく、校内に到着して相談室に入ることができたのである。もちろん、その時の対処は、他の教職員と共通理解を図ることや親との密接な連携を前提としたきめ細かな配慮があったことは言うまでもない。以下は対処事例の概要の一部分である。

事例 A 中2女子

主訴：小学校時代から不登校状態にあり、中学進級後も1年以上家庭に閉じこもっている状態だった。

来談後の対処：地域の相談室で不登校の子どもの母親と継続面接していると、子ども自身が母親と一緒に面接場面に現れた。趣味やタレントなどの軽い話題でかわる内に、子どもが学校復帰に強い願いをもっていることが分かってきた。そこで、学校復帰のための手だてを提示した。もちろん、長期に渡り欠席しており、教室復帰はとてもかなわないこと。ただし、地域の相談室の雰囲気や延長で、校内の相談室に通うことは可能であることを示唆した。

さらに、どのように学校の敷地内に入り、相談室まで至るかについて校地及び校舎の略図を下に説明した。すると、子どもはぜひ学校の相談室に行きたいという意思表示をした。もちろん、これらのいきさつは学年主任に伝え、登校当日は大げさに対応しないことを共通理解した。

再登校を自ら決めた当日、授業時間中に母親の車に乗り自宅を出発し、相談室近くの空き地に車は到着した。近寄ってみると、制服姿の子どもが後ろ座席で体を丸めるような形で身を隠していた。そこで、周囲に誰も人の姿が見えない頃を見計らい、「今がチャンスだよ」と声をかけた。すると、体をいきなり起こし、自ら車を降りて、私について一目散に駆け出し、急いで相談室の中に無事たどり着くことができた。その後、しばらくは同じような様子で登校していたが、次第に不安や緊張感が除かれ、学年主任や担任とも対応ができ、校内の相談室が子どもの居場所となっていくた。

以上のように、相談室が校舎内のどこに位置づくかは、不登校の子どもの学校復帰や登校への意欲の発現を大き

く左右することになる。しかし、実際には先にも述べたが大半の学校では相談室が職員室近くに位置していたり、人通りの多い廊下側や保健室近くに位置づいたりしている。もちろん、相談室が不登校問題のみを扱う場所でない故、やむを得ないこともある。

ただ、教師やSCにとって不登校の子どもが学校の校地や校舎内をどのように認知しているかをアセスメントすることは、学校場面での子どもの不安や葛藤を理解し、それを軽減するための工夫をする上でいかに役立つかは言うまでもない（Tambirajaha,2008）

②鍵となる全職員の共通理解を図る場

先にも述べたが学校は子どもの不登校開始の兆しを早期に気づくことができる場所である。それゆえ、担任はもちろんのこと、他の教師や養護教諭及び管理職、そして事務職員に至るまで不登校開始の兆しの基本的事項について共通理解を図っておくことは大切である。そのため、不登校に関する研修会の場に時には全職員の参加を促すことも校内の相談体制を機能させる上で重要である。もちろん、そこで取り上げる内容については事前に十分検討し、守秘義務の厳守を前提に行わなければならない。

以下の事例はその一例である。

事例 B 小4男子

主訴：9月1日の始業式当日から体調不良を訴え休み始める。数日後、完全に登校をしなくなる。

来談後の対処：2週間後に相談室に断続的登校をするがそこから一步廊下にでることに強い不安を示す。特に所属する学級に入ることを拒否し続けた。1ヶ月程の間、相談室を居場所に図工や理科の作品づくりに取り組む。給食終了後、親の迎えにより車で下校。この間、毎週金曜日の放課後に行われる全職員の打ち合わせの場を活用し、生徒指導主事や管理職から事例の対処の経過について報告がなされ、当分は見守る体制を取ることが共通理解された。

10月半ばより、突然、職員室で管理職や教務主任、養護教諭と食事を開始する。さらに用務員の依頼で給食の後始末をしたり、養護教諭のサポートで保健室近辺の掃除をしたりする。その後、教務主任の働きかけで図工室の授業のみ級友と一緒に参加し始めた。しかしなお学級復帰に対して、級友への強い不安が見られた。12月に入り、担任の配慮で学級の他の子どもがBに対してどのように思っているかということについて詳細な情報を得た。そして1月に入り、暴露法を導入して3日後、自らの意志による学級復帰が可能となった。その後一時、

不安定な時期もあったが、2月以降、完全に学校適応するに至る（寺田, 2009）。

この事例では、全職員のBに対する情報について共有することで、管理職を初め事務職、校務員に至るまで全職員がそれぞれの持ち場でBに対処していることがわかる。

このような全校体制に基づく事例への対処に加え、学校は不登校の子どもの発生を未然に防ぐための取り組みをすることが期待される。

たとえば、不登校に直接的ないし間接的に繋がる子どもの様々な言動について把握することは、不登校の予防的対処にとって大いに役立つ。以下はその項目である。

- ・家庭環境（家族構成・親の養育態度や意識・経済状況など）
- ・対人関係（孤立気味・同調的・攻撃的・両極性など）
- ・既往歴（乳幼児期の疾病・アトピー・喘息・他、過去の出欠状況など）
- ・生活スタイル（基本的生活習慣・遅刻早退・言動や服装など）

装など）

- ・学習（知能・学力・成績・教科の好き嫌い・学習習慣など）

なお、これらの詳細な情報は、入学直後や学年始めの家庭環境調査票への記入の依頼や、担任による家庭訪問や個人懇談の場で守秘義務の厳守を前提に必要なに応じてたずねるという形で入手することが望ましい。

③生活意識の実態把握

不登校問題を未然に防ぐには、担任による子どもの日頃の学校生活や家庭生活に対する意識や不安等に関する情報を得て、その実態をもとに個別または集団で対処することも有効な方法の1つである。

これについては近年、市販されているものも多くあるが、スクーリングの段階であれば以下のような簡単な調査項目を基に学期始めや学期の終わりに定期的の実施し、集計することで学校全体や学年及び学級の子どもたち実態を把握し、指導や助言に活かすことができる。

学校生活意識アンケート用紙

年 組 番号（※） 性別（ ）

「新しい学年となり1ヶ月近くが過ぎました。みなさん方が学級や学校生活についてどのように感じているのかを知り、今後の相談活動に役立てたいと思います。なお、答えたことで個人が特定され、皆さん方が困ることのないように取り扱いについては十分、気をつけますので感じたことをありのままに答えてください。」（※個人を特定したい場合は出席番号の記入を求める）

a. 学校生活について（当てはまるものにチェックを入れなさい）

とても楽しい□ 楽しい□ あまり楽しくない□ ぜんぜん楽しくない□

b. 今、あなたは悩みや心配ごとがありますか（当てはまるものにチェックを入れなさい）

とてもある□ 少しある□ ほとんどない□

c. どのような悩みや心配事ですか（当てはまるものに全てチェックを入れなさい）

勉強・成績□ 進路□ 係活動□ 家庭の出来事□ 親の無理解□ 友達がいらない□

友達関係□ 自分の性格□ 顔やスタイル□ 病気□ 遊ぶ時間ない□

塾・習い事□ 小遣い□ 先生□ 上級生□ 異性□ 部活動□ 食事・給食□

睡眠□ 嫌な言葉□ 嫌な行為□ 学校に行きたくない□ 目標がない□

図6～7は、このアンケート用紙を用い筆者がかつてある中学校で全教職員の理解を得た上で4月末に全学年の子どもを対象に調査した結果の一部である。多くの子どもたちが学校生活を「楽しい」と思っていることがわかる。しかし、学校生活や家庭生活において悩みや不安を持っている子どもたちの割合は学年が進むにつれて次第に増えていることも明らかとなった。

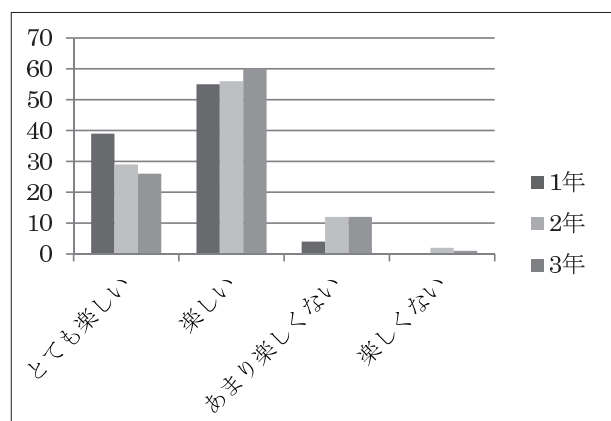


図6. 学校生活の楽しさ(%) (寺田, 1993b)

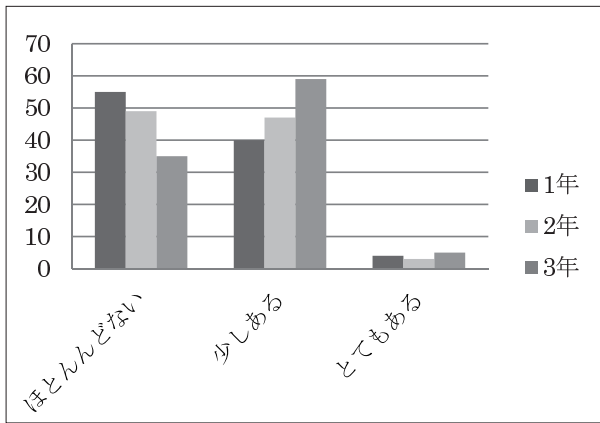


図 7. 学校生活の悩み・不安(%) (寺田, 1993b)

このように 4 月当初や学期毎に子どもたちの学校生活や家庭生活に対する満足感や悩み・不安などの実態を把握することで、個別に（記銘の場合）、または、学級や学年、さらに学校全体の間できめ細かな助言や指導、さらに担任による個別の相談や SC によるカウンセリングの導入も可能となる。

④担任の基本的対処の枠組み

担任の戸惑い

実際に学級の子どもが学期途中で不登校状態となった時、どのような心の状態になるのだろうか。筆者の場合には以下のものであった。「何故、あの子どもが不登校に突然なったのか」といった驚きと「どうして気づくことができなかったのか」という悔しさがこみ上げてきた。さらに、「どうすれば登校させられるか」といった再登校の方途ばかりに目が向いた。さらに、「自分の力で先ず対応して、それでもだめなら他の先生方に相談してみよう」というように組織的なかわりよりも個人プレイを最優先しがちであった（寺田, 1996）。

今、振り返れば、不登校の子どもを学級から出してしまったという罪悪感に苛まれ、校内で公になることを恐れ、ますます不登校の事例を抱え込んでしまっていたと言える。

それでは、このような担任の抱え込みを未然に防ぐにはどのようなことに留意すればよいのだろうか。

学校に登校していても、教室に終日居ることができない子どもが多く、これらの子どもへの対応に戸惑う担任は多い。このタイプの不登校は「学校内不登校」とも呼ぶことができる。タイプとしては以下のものがある。

- 登校するが、職員室や保健室を居場所としている
- 教室に入ることではできるが、授業を受けられない
- 体育や集会活動などには参加できるが、教室で授業を受けられない
- 授業を受けることはできるが給食を学級で食べるこ

とができない

- 社会見学や修学旅行など楽しい行事に参加するが教室で授業を受けることができない

担任の意識と果たすべき役割

実際に学級の子どもが突然に不登校となった場合、その対応に戸惑うのは当然である。特に学期の途中で不登校となった場合、担任は未然に防ぐことができなかったことへの自責の念にかられたり学級経営に自信を失ったりすることもある。このように担任が全て責任を負う必要はないものの、やはり担任として不登校の子どもへの対応の現実について謙虚な気持ちで見直すことは、今後の対処の指針となりうることは言うまでもない。以下は、担任が一般に行う対応の一例である。ここでは担任の心理的力動と対応により生じる問題を検討してみよう。

家庭との関係

- 不登校状態となり、親の欠席理由（体調不良など）を真に受け、一週間以上もそのまま放置する。
- 家庭訪問もせず、ほとんど電話で毎日親とやりとりをする。

担任の心理的力動：不登校の兆しや具体的対応の仕方がわからず、親からの働きかけに待つしかない。

級友の働きかけ

- 学習プリントや宿題などを自ら持って行ったり、または、近くの子どもに届けさせたりする。
- 朝、家庭に呼びに行かせたり、親しい友達から電話をかけさせたりする。

c. 放課後や休日に親しい子どもを自宅に遊びに行かせる。
担任の心理的力動：担任や級友が毎日、何かの形で子どもと関わりをもてば、その内に登校したり学級復帰したりできるかもしれないという気持ちがある。

家庭訪問

- 毎日、忘れず家庭訪問する。
- 時々、家庭訪問する。
- 予告しないで突然、家庭訪問する。
- 他の教師と一緒に家庭訪問する。

担任の心理的力動：家庭訪問することで子どもや親と直接会って会話をすることができるし、学校としての誠意を示すことができる。

不登校の一般的特性の理解

担任が不登校の一般的特性を理解していることは、不登校の早期発見及び対処や再発の予防を可能とする。その一般的特性としては以下のような事項がある。

- ・ 開始時期：入園児や小学校入学時。発生のピークは 5 ～ 7 歳と 11 ～ 14 歳。
- ・ 性差：男女に有意差はない。

- ・出生順位：一人っ子ないし末っ子で高い発生率
- ・主な症状：食事の混乱と不眠。神経症的症状
- ・家庭要因：小規模家族。凝集性の高い家族。親への分離不安、家を離れることへの不安
関わりのある人の死。子ども自身や親の健康状態
- ・母親の性格：過保護。アンビバレントな母子関係
- ・父親の性格：受け身的
- ・人格特性：神経症的。内向性。高い同調性・内向性。
依存性・未成熟、低い社会性
：自己や達成度の過剰評価。低い自己評価
- ・学業：平均以上か高い成績
- ・学校要因：学校組織や教師の態度。学級内の外傷的出来事。転校、学級編成、
教師の特性、授業内容が不安の原因、試験、暗唱、批判、登校方法、通学路

教師はともすれば不登校の原因を子ども自身の問題（性格など）や家庭の問題（養育態度・親の性格など）に帰属しがちであるが、このように様々な視点から不登校の要因を理解することは、より望ましい対応をする上で役立つ。

3. 機能する校内の相談体制づくり

①初めて不登校事例に対処する時の基本的枠組み

筆者が不登校事例の相談に直接関わり始めたのは1993年4月からであった。「登校拒否」という用語が主流で、今日の「不登校」という用語の普及はその後のことである。当時、日々の相談の傍ら、対処事例の記録、不登校に関連の著者や新聞・雑誌の記載内容などを随時、貼り合わせ、月ごとに一冊にしたものが48冊手元にある。それらを順に読み返せば、初めて不登校事例に対処した筆者がどこに主眼を置いていたかが明らかとなる。

例えば、2004年4月当初、「学校でできることは何か」が主テーマであった。そこで早速、小泉(1990)の著書を手がかりに、不登校の判定、タイプと治療効果、学校における指導体制と各分掌が果たすべき役割等に関する基本的事項を数枚の用紙にまとめ、随時活用しようと試みた(小泉,1990)。

取り上げたテーマは以下の内容であった。

a. 「どうなったら治ったといえるのか」というアセスメントの基準

皮相的理解

- ・登校するようになった
- ・周囲が何とかして学校に行かせようと努める
- ・転校させたら学校に行くかもしれない

本当の理解

- ・誘因：学校にあると考えられる
- ・真因：本人のパーソナリティや親子関係及び養育態度

治ったという基準

- ・真因の除去や改善がみられる
- ・子どもの行動や人柄が変化してきた
(完全主義・融通の無さ・社会的&情緒的未熟さ)

b. タイプによる対処効果

- ・高い再登校：26/35、低年齢ほど高い（小学校中学年まで）
- ・タイプ別
神経症的 A：親子の通所によるカウンセリング
神経症的 B：環境調整や生活改善必要
精神障害

c. 学校としての配慮事項

理解の枠組み

- ・様々な身体症状の理解：頭痛、腹痛、吐き気、発熱…朝はひどく午後元気
- ・親の対応：病院を連れ回し、休みを勧められ、治療遅れる
- ・中高生：閉じこもる、生活の乱れ

相談機関や治療機関との連携

- ・近隣の相談所、病院等の情報入手
- ・協力：専門機関に一任せず、治療経過に従い受け入れ体制づくり

d. 教育相談係

4つの原則

- ・校内事例研修：全職員が理解
- ・担任の立場で相談相手や支援
- ・これまでの対応・態度の反省
- ・専門機関に委託、連絡

職務内容

- ・不登校の子どもへの直接的援助：知識の習得&実践の積み上げ
- ・相談時間の確保や相談室の整備
- ・校内の協力体制づくり

基本的態度

- ・担任中心の指導・援助
- ・予防、早期発見
- ・校内の援助システムづくり

予防の視点

- ・学校要因に着目
- ・要因削減：楽しい学校、分かる授業、まとまりある学級、友達の承認

・子どもの心の安定と意欲

早期発見のためのポイント

・不登校チェックリスト活用：精神的健康度

・「よい子」の見直し

・悩み調査

学校全体への啓発

・「怠け」ではない

・相談室便り：教師や親へ啓発

・現職教育&PTA研修：カウンセリング、教育相談の講演

・事例検討会

e. 不登校対策システムづくり

担任を中心としたシステム

・生徒指導、教育相談係主導：係がファシリテーター役

・学年主任主導：学年で対応、係はコーチ

・管理職主導：校長、教頭が対応、指導

・学校全体：担任、管理職、生徒指導、教育相談係、学年主任、養護教諭、他

以上のような基本的事項に基づき不登校への理解や対処を行うには、校内の教育相談係などキーパーソンを核とした組織的体制の下で行うことが何よりも大切であると考えた。つまり、当時筆者は、不登校の子どもの学校復帰を達成するために学校の相談体制づくりに重きを置いていたことがわかる。もちろんこれは初めて不登校に本格的に対処する者にとって当然のことであり、学校という組織や相談体制の中で活動するには不可欠なことであった。

その意味で小泉（1973,1980）の著書は、初めて不登校の相談活動に組織的にかかわる立場の者にとって、様々な具体的な視点が記述されており、今日でも参考になると考える。

②実態把握

続いて浮上したテーマは、所属する学校全体の不登校の子どもの実態把握である。4月当初に行ったことは、前年度までの実態を明らかにすることだった。以下はその実例である。

基本的情報：子どもの名前、性別、欠席及び遅刻・早退日数、おもなきっかけ（原因）、担任と子ども及び親とのかわり、相談機関や医療機関の活用など

A子、中3、欠席日数80日、原因：親の無理解、低学力、中学卒業後は働く意志が強く勉強する必要はないと考えている。

B子、中3、欠席日数53日、原因：対人関係が乏しく学級に馴染めない、体調不良の日が多い

C子、中2、欠席日数32日、原因：体調不良で週明

けの月曜日の欠席や疲労による週半ばの欠席が多い、登校すれば快活で学習も意欲的

D男、中2、欠席日数204日、5月半ばより体調不良を訴え、6月から完全に不登校、相談機関に通所歴あり、自己表現が乏しい

このように1人1人の子どもの情報を収集した上で、個々の事例について不登校のタイプ分けや具体的対処法を検討しようとした。

さらに、どのような変化が見られたら再登校や学級復帰が可能になるのかということも筆者の関心事の1つであった。

以下は石川（1990）による「登校の兆し」の概要であり、とてもわかりやすい。

友人関係・学校関係

- ・次第に友達や学校の情報に関心を示すようになる
- ・友達や担任からの電話に出て話す
- ・友人や担任の訪問に対応する
- ・放課後、担任と学校で会うことができる

家庭場面

- ・会話量が全体として増える
- ・過去の学校の出来事を話す
- ・今の学校行事や授業のことを話題にする
- ・将来の希望や夢を語る
- ・登校を仄めかすことばが出る

日常生活

- ・生活リズムが戻る
- ・笑顔が出て、身体の動きも生き生きしてくる
- ・食欲が増進し、食卓を囲む時間が増える
- ・床屋に行ったり、アイロンをかけたりするようになる
- ・自分の考えや欲求を口にする

家族

- ・心が安定し、笑いが出る
- ・家族相互の意見が素直に述べられる
- ・親子間で適度な距離が見られ、両親は親密になる
- ・有効的、温かな雰囲気が見られる

学級

- ・学級内で子どものことが話題となる
- ・行動レベルで動きが見られる（手紙、電話、家庭訪問など）
- ・学級全体で登校に向けて取り組もうとする
- ・子どもの登校を待ち望む

以上のような「登校の兆し」は具体的で、子ども、親（家庭）、級友それぞれについて述べられており、再登校への対処を検討する上で大いに参考となる

筆者はこの延長線上で以下の記録表を作り、校内で活

用しようとした。(表1参照)。毎日、職員室内外に記入される子どもの欠席・遅刻等の状況を表1のように1～2週単位で一覧表に転記すれば、不登校の兆しや

完全な不登校状態を見極められる。さらにその状況に応じて担任が果たすべき具体的対応を提言することができる。

表1. 子どもの欠席・遅刻・早退状況の把握表(参考例)

学 年	学 級	生 徒 名	週毎の出欠状況(記入例)					欠 席 累 計	備 考 欠前 席年 度	基本的対応
			6日 (月)	7日 (火)	8日 (水)	9日 (木)	10日 (金)			
1	A	A	◆	◇	◇	◇	◇	1	4	要観察
1	B	B	チ	チ	◆	◆	◆	3	180	家庭と連携
2	A	C	ハ	ハ	ホ	ハ	◆	2	60	親面接
2	C	D	◇	◇	◇	◇	◆	1	0	要観察
3	A	E	◆	◆	◆	◆	◆	5	90	親面接
3	B	F	◇	◇	◆	◇	◇	1	25	観察・親に連絡
3	C	G	◇	◆	◆	チ	◆	3	32	家庭訪問
			早退(ハ)	遅刻(チ)				◇出席 ◆欠席		ホ保健室

続いて考案したのが個々の不登校(または不登校傾向)の子どもの「相談記録用紙」である。最初は2ヶ月単位であったがその後1学期単位で記入可能な様式に修正し活用した(資料I参照)。

記入表の活用手順としては以下のようなものである。

- 生徒指導部や教育相談員会場で活用の趣旨を説明し理解を図った後、職員会議に提案し、全職員の共通理解を得る。
- 担任は、日々の子どもの出欠状況に留意したり保護者からの電話等による連絡内容を記録したりして、気になる子どもについてその都度、必要箇所を記入していく。
- 記入に当たっては養護教諭と連絡を密にし、より具体的内容を記載する。
- 生徒指導部会や教育相談会議等の場所で記入した内容について説明する。
- 今後の見立てやリファーマーについてSCなどの専門家を交えて協議する。
- 次年度の担任は、前年度からの記入用紙の記述内容を基に該当の子どもへの関わり方や支援内容を明確にし、他の教師及び保護者の理解を得て対応する。
- 週毎の記録や月ごとの記録から、不登校のタイプや時期を見定め、その時期に応じた対応をする。

実際に活用した例として以下のような経過がある。

事例C 中学生 前年度から不登校が始まり、4月6日の始業式当日からも欠席
家内では暴言を吐くなどとても不安定な状態が続いている。

対応例

ステップ1: 出合いを求める

・新担任という不利な立場にある

○4/15 家庭訪問を行い、母親と面談し、親の苦しみ傾聴 学校への信頼

ステップ2: 具体的方策提示

○積極的来談を親が自己決定

ステップ3: 深い子ども理解

○母親の語りを通して

子ども像・家族のつながり・真因(母子分離不安)

ステップ4: 対応のあり方を探る

○子ども相談センターとの連携

保護者が子ども相談センターのスタッフと校内で相談

結果: 母緒から学校に電話がある。

「子どもが自分で動き出すまで待つことにした。家ではとても落ち着いてきており、5月の子ども相談センターの親子の会には本人も参加したいと語っている」

: 母親来校

「あまり変わらないがクッキー作りなど自分でも動き始めた」

: 担任: 本人の心の負担を軽減するため友人が手紙を届けるのを控える

③欠席の把握

子どもの出欠状況の把握は、日本において担任が日々

職務の1つとして行い、毎月、学期ごと及び学年末に累計し管理職に報告している。さらに連続一週間以上に渡る欠席者が出た場合は、即時に市町村教育委員会に報告しなければならない。これは学校や教委が早期に不登校の実態を把握することでその後の対処が一層容易になり得ることを意味する。担任による不登校の子どもの出欠状況の把握の大切さは、その後入手した Blagg.N.(1989)の著書においても述べられており、筆者が相談業務に従事し始めた当初の試みは適切であったことがわかった。さらに彼の著書の付録に子どもの不登校状態を長期に渡り記録するためのフレームが掲載されていたので、それを基に作成したのが相談記録用紙である。

このような学期や年間を通した出席表は、不登校の子どもの数年間に渡る出欠状況やその特徴を一目で知ることができる。これを活用した場合、以下のような事柄についての的確にアセスメントすることも可能となる。

- ・いつの時期から遅刻や早退、断続的欠席が始まったか
- ・完全に不登校状態となったのはいつか
- ・週明けや週末により出欠状況に違いが見られるか
- ・学期により出欠状況にどのようなパターンが見られるか
- ・その学年の不登校は最初のできごとか、それとも前年度までにもあったのか
- ・過去に不登校となり再登校し始めたのはいつか、それと今年の不登校との関連性はあるのか

など、実に様々なことが分かる。

筆者は試みに同じ様式で1年単位の不登校の子どもの出欠記録表を作成してみたが、確かに子どもにより不登校のパターンがあることがよくわかった。しかしながら、この記録表からは子どものその時々の詳細な状態や家庭及び学校の子どもへのかかわり方については知ることができないことに気づいた。そこで、独自に考案したのが記録表である（資料Ⅰ参照）。

この記録表は家族構成などの基本的事項の他、子どもへの対応による行動の変化、その時々々の相談記録、家庭での子どもの具体的な様子のチェック（登校渋り、家族関係、さらに怠学傾向など）、1学期間の詳細な欠席記録などを一枚の用紙に記入することができる。

この記録表の長所は、不登校の子どもに対する周囲の係わり方と照らし合わせて子どもの変容を長期間に渡りとらえることができることである。この記録表を担当や相談員が活用することで、子どものその時々々の変化に気づくことができる。校内の相談会議や事例検討会の場でもこの記録表を基に今後の対処を話し合うことも容易となる。

Ⅱ 不登校の校内研修プログラム

1. 教師を対象とした「不登校の理解と対処法」の研修の実際

①理解と対処法の結合

研修のテーマや対象者の特性に応じて研修内容を吟味することは、研修後、教育の実際場面で機能するために不可欠な条件である。

たとえば、「不登校問題の理解」がテーマであるならば、これまでの内外の不登校問題への関心の高まりの背景や対処法の歴史的概要について触れながら不登校の今日的動向やその特性について取り上げる必要があるだろう。また、「不登校事例の理解」を目的とするならば、担任を中心として収集された不登校の子どもに関する様々な情報と、これまでの学校としての関わり方の経過についてのレポートを基にすることが前提となるだろう。さらに、「不登校事例への対処」をテーマとすれば、収集された事例の情報や対処経過の概要を基に、不登校の子どもや親、さらに担任を取り巻く学校の相談体制が現在どのような状態にあるかを明確にする、即ちアセスメントする必要があるだろう。現状や課題についてお互いが共通理解を図った上で初めてどのようにそれぞれが具体的に対処するかを検討することになる。

実践例

初めて不登校の教育相談の講師という立場に立った時、どのような枠組みで研修内容を構成していたのだろうか。当時の資料を基に振り返ってみることにした。

- a. 担任として不登校の事例に遭遇した時の体験談を語る
 - 「なぜクラスの子どもが突然不登校になったのだろうか」という疑問が浮かび、本人や家庭の問題が脳裏をかすめる
 - ・「どうすれば再登校するか」を先ず優先的に考えてしまう
 - ・あれこれ対応しても事態は好転せずに時だけが過ぎ、どうすればよいかわからない
 - ・周囲の同僚や管理職の助言がありがた迷惑に思われ、却って混乱状態に陥る
- b. 対応の難しさから見えてくる対応策
 - ・「不登校」という用語の曖昧さを払拭するため大まかな不登校の概念を理解する
 - ・不登校以外の子どもへの対応も大切ゆえに、無理せず誠意を持って気長に対応する
 - ・担任として時間的制約もあり、校内の他のスタッフに理解と協力を得る
 - ・先が見えないだけに、これまでにどこまで対応がな

されてきたか見極める

- ・校内のスタッフで役割を決めて対応し、時には外部の専門機関を活用する
- ・不登校の発生後の対応に終始する

たとえこのように研修の構造を組み立てて、対応策を示唆したとしても、参加された先生方と筆者との間にかなりの隔たりがあるように思えてならなかった。即ち、事例についての真の共通理解が十分になされないまま、先生方が希求されていた実際場面での一般的な対応策を述べたに過ぎなかったのではないかと研修終了後、常に反省させられた。

②不登校の経過モデルの盛衰

そのため、どうしても欲したのが不登校の子どもの状態像に関するアセスメントの方法であった。我が国で当時出版されていた不登校に関する著書を入手し、この内容について記述されたものを整理しようとした。そこで出会ったのが、金子（1992）の「不登校の進行、回復過程表」、小野（1985）の「登校拒否の変化段階」等であった。これらは、学校や相談機関で実際に筆者等が長年対処してきた不登校事例を基に描き出されたモデルである。これらをさらに包括するような形で一覧表にしたのが吉村（1988）の「登校拒否の経過モデル」であった。

吉村の経過モデルに照らして校内の不登校事例を教師と一緒にアセスメントすることによって、同じ目線で子どもや親、そして、学校サイドが今、どのような状態にあり、どう対応しているかを共通理解することが可能となると考えるに至った（寺田、2006a; 寺田、2007）。早速、「経過モデル」を提示し、研修を行っていくと、子どもや親の状態像はもちろんのこと、教師の日頃の対応の仕方の現状や課題までも具体的レベルでアセスメントできるようになってきた。

不登校の経過モデルの活用については本論文の他の箇所でも述べるが、一時期、都道府県や市の教育センター等で研修テーマとして取り上げられたこともあり、学校場面で対応に苦慮されていた先生方にとってこのモデルの登場は福音とでもいうべきものであっただろう。しかし、その後、不登校の経過モデルの活用は余りなされず今日に至っていることも事実である。

一体、その背景にどのような事があるのだろうか。1 つには、不登校の増加に伴い、「不登校はどの子にも起るものである」といった先生方の不登校に対する慣れの感覚や安堵感がある。また、「原因やきっかけは多様であり、対応は難しい」ということから「不登校は学校で抱え込まず、早い段階で外部の相談機関や医療機関に任せるべきである」といった一種の外部機関への依存傾

向もかなり浸透してきている。

それゆえ一旦、不登校の子どもが出れば、校内で事例検討をし、SC に親面接を依頼したり、他機関へリファーしたりする体制がキューピッチで整えられることになる。

確かに、見通しのないまま試行錯誤的に対応するよりははるかにこの方が不登校の子どもや親にとってはありがたい。しかし、一方で、親にとっては、担任や学校から途中で、何も理解できないまま一方的に見捨てられた気持ちになることは多い。一度このように学校と親との関係が気まづくなると、親の学校不信や我が子への対応への不安が増し、益々、学校に親が依存しようとしたり、逆に、親が自ら学校側の対応を拒否する傾向は強まる。結果的に、親子共に孤立せざるを得なくなる。

③経過モデルの有効な活用法

せっかく不登校の経過モデルがあったとしても、それを学校場面で活用されなければ無用の長物と化すだろう。そこで、筆者は吉村氏に「登校拒否の経過モデル」を研修会や事例への対処場面で活用することについて伺い、内諾を得た。それ以後、この経過モデルの枠組みを大切にしながら少しずつ加除修正を加えたものを今日まで活用してきた（寺田、2006a）。

面接場面で活用してみると、親からは「この経過モデルを提示されたことで、子どもの今の心の状態や行動がよく理解できるようになった」「だから子どもが荒れるのですね」「今は模索期ですが、今後の見通しが持てたように思います」という声をよく聞く。先生方からは「学校として何をすれば良いか全く見えていませんでしたが、このモデルに照らしてみても、今はこれで良いことがわかり、自信になりました」といった安堵した気持ちが語られることが多い。さらにこの「経過モデル」の学校場面での普及を願い、研修に参加された先生方に配布し、校内での活用を啓発している。

③不登校に関する校内研修会のあり方

筆者は 20 年ほど前から小中学校の教師を対象に不登校問題の研修会にかかわってきた。研修は、該当校の事例の概要を基に問題点や今後の対応の方向性を明らかにするという形式で行われる。実際に研修会の講師として出てみると、数名の担任がそれまでの詳細な不登校事例

	学校	子ども	親・家族	学校
・し ぶ り 期	一 般 的 対 応	家 庭 学 校 場 面 の 状 態 像	親 や 家 族 の 状 態 像	望 ま れ る 対 処
・混 乱 期				
・模 索 期				
・回 復 期				
・自 立 期				

図 8. 登校拒否の経過モデル（吉村、1988）

の対応の経過について文書を基にかなりの時間報告し、それについて先生方があれこれ質問したり、事例に直接かかわってきた養護教諭や他の先生が事実などをつけ加え、最後に講師に助言や指導を求めるというパターンが一般的である。学校によっては事前に当日検討する事例報告書を送付されてくる所もある。これは学校側の講師への配慮かと思うが、基本的には講師と言えども当日配布された資料を基に先生方と一緒に事例を共通理解し、今後の具体的な関わり方を検討するといった形式の方が事例に対する新鮮味とその学校の教育環境や人的資源を把握しながら今後の課題をより明確にすることができるのではないかと考える。

ただ、先生方にすれば、日々の学習指導や生活指導及び諸行事に多忙中で「これまでこのように学校として不登校の事例に対応してきました。何が問題か、今後、どうすればよいかを教えて欲しい」という願いが強いことがわかる。即ち、先生方にとって限られた時間の中で、不登校の子どもと他の子どもたちの両方にエネルギーを注がなければならないという現実がある。

更に、先生方がこれまでに不登校事例にかかわったかどうか、研修会の深まりを大きく左右することは言うまでもない。以下は以前、筆者が研修会の講師として出向き、研修終了直後に一斉に記述を依頼したアンケート結果である（寺田、1992；資料Ⅱ参照）。

かなり以前のデータであるため、今日の動向とは相容れないが、以下のことが言える。

20代から30代の先生の大半が、過去または現在も不登校の子どもの担任を経験していること。不登校に関する研修を受講したことのある先生は、20代と50代に多いこと。更に、当時行った研修の有用性については、40代の先生以外、とても高いことが示唆された。

図10は、世代によってどのような研修内容が有用であったかを示したものである。20代では親への対応が最も有用で、30代では理解の仕方や校内の協力体制が有用であったことがわかる。40代では、理解の仕方と今後の方向性が有用であり、50代では事例報告と今後の方向性というように、先生方の世代の違いによっても研修で求められるテーマが異なることが示唆される。

図11は、今後どのような研修を希望するかをたずねた結果である。この結果から示唆されることは、目の前の具体的な不登校事例にいかに対応すべきか、そのために事例研修を多くし、次いで親への対応の仕方を学びたいという願いが強いことが分かる。

以上述べてきたように、学校における不登校問題に関する研修会に外部から講師として加わる場合、ともすれ

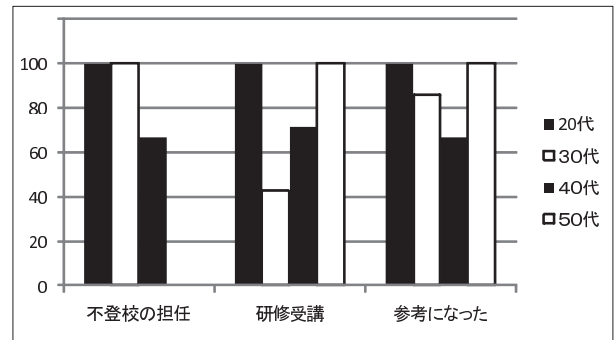


図9. 不登校の担任及び研修経験の有無 (%)

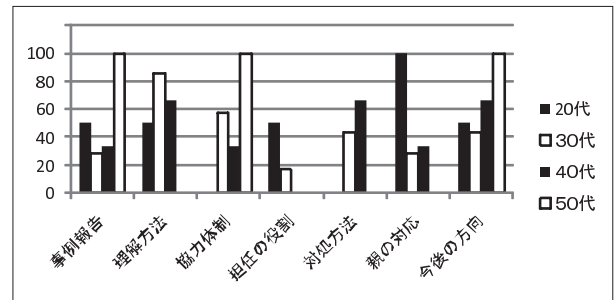


図10. 参考となった研修内容 (%)

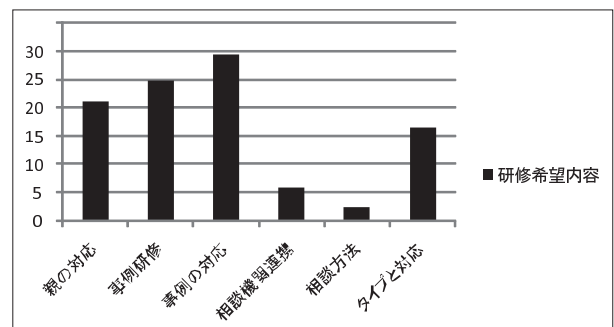


図11. 今後の研修希望内容 (%)

ばこちらの一方的な理論づくめの講話に終始したり、長時間の事例の経過報告への一般的なコメントで時間切れとなったりすることは多い。そのため、多忙な時間を割いて行われる研修会も形式的な形で位置づけられ、教師にとってもまた講師にとっても不完全燃焼のままになりがちである。

このような問題を未然に防ぐためにも、事前に簡単なアンケートへの記入を依頼して、先生方の過去の不登校の担任経験や研修経験の有無、特に希望する研修内容等について情報を得ておくことが不可欠といえる。

④担任・学校関係者によるアセスメント

不登校の子どもの理解を深め、子どもの再登校や学級復帰及び自立を促すには、子どもや親と実際場面で直接かかわる担任や他の学校関係者に対するきめ細かな情報が欠かせない。その一助となるのは吉村（1988）の「不登校の経過モデル」の表である。この表を基に学校関係者と面接をすれば、担任の子ども理解の程度や実際の対

応の現状をある程度客観的にアセスメントすることはできる。さらにまた、Blagg(1987)の以下の質問項目を活用すれば詳細な情報を得ることが可能となる。

ここに述べてきた学校の教職員及び相談体制そのものに関する質問項目は、不登校の子どもや親に対してそれまで学校がどのような考え方の基で実際に対応してきた

かをかなりの確にアセスメントすることになる。なお、各質問項目はあくまで学校全体にかかわるものであり、管理職や生徒指導及び相談担当者等が他の教職員と協議しながら最終的な判断を基に答えることが大切であると言えよう。

資料Ⅱ 不登校の研修用アンケート用紙

趣旨説明と協力要請

「不登校の子どもの心の理解に基づく対応は、親さんの努力のみではとてもむずかしいものがあります。特に、不登校の対応に当たり、学校と家庭との信頼関係に基づく協働が強調されている今日、学校として何ができるかを全教職員で検討するための基礎的情報を得るためにいくつかの窓からお伺いしたいと思います。なお、質問内容によっては答えることが難しいものもあるかと思いますがそれは学校側にお任せいたします」

教職員の動機づけ

- a. 不登校の子どもや親に対する教職員の態度はどのようなですか。
 同情的☐ 現実的☐ 心配する☐ 強い関心☐ 協働的☐ その他()
- b. 不登校問題に最も関心のある教職員はどなたですか。
 担任☐ 学年主任☐ 生徒指導主事☐ 教育相談係☐ 養護教諭☐ 管理職☐
 SC☐ 相談員☐ その他()
- c. 問題解決のため学校はどのように対応していますか。
 担任のみで対応☐ 学年部で対応☐ 相談部・生徒指導部で対応☐ 校内の専門家活用(SCまたは相談員)☐
 その他☐ ()
☐ そのまま放置☐
☐ 対応内容☐ (子ども☐ 親☐ その他☐)
 ・家庭訪問☐
 対子ども: 会話☐ 遊び☐ 学習支援☐ 手紙☐ 電話☐
 対親: 母親☐ 父親☐ その他() 会話☐ 相談☐
 ・相談室対応
 対応者: 担任☐ 主任☐ SC☐ 相談員☐ 管理職☐ その他☐ ()
- d. 外部の相談機関や医療機関と連携☐
 ・機関名(): 主担当者: 医師() 心理士☐
 ・連携内容: 再登校支援☐ 対応法検討☐ 親との合同面接☐ 情報交流☐
 専門機関主催の活動に参加促し☐ その他☐ ()

校内の相談体制と対応の柔軟さ

- a. 子どもや親と直接カウンセリングをされるのはどなたですか。
 担任☐ 学年主任☐ 生徒指導主事☐ 教育相談担当☐ 養護教諭☐ 管理職☐
 SC☐ 相談員☐ その他☐ ()
- b. 親または教職員の意識や対応の仕方を柔軟に変容することは可能ですか。
- c. 子どものために特別のワークを組むためにクラスやグループを変更できますか。
- d. 有効と思われる特別の支援活動や援助を行うことはできますか。
- e. 登校後、子どもがしばらく落ち着いていられる静かな部屋や図書館、保健室や相談室などを利用できますか。
- f. 必要に応じて子どもに積極的に随伴するなど対応できる教職員がみえますか。

校内の相談システム上の問題(はい・いいえによる応答)

- a. あなたの学校では不登校が問題となっていますか
- b. 該当する不登校の子どもの級友や教職員の側に問題がありますか。
- c. あなたの学校では教職員の転出や転入が頻繁にありますか。
- d. 不登校の対応にとって障碍となるような校内の出来事や問題がありますか。

あとがき

本論文は不登校問題に直接対処する立場にある学校側に視点を当てたものである。確かに不登校のきっかけや原因は今日益々多様化かつ複雑化したものであることが多くの先行研究により指摘されている。このような現状を踏まえたとしても、一旦、子どもが不登校状態に陥れば、再登校はもとより学級復帰すら容易ではない。そのために、学年を渡って長期間、家庭や相談室などを心の居場所とせざるを得なくなる。さらに、中学生や高校生の不登校の事例の場合は進学や進級といった現実の壁に嫌が上でも直面でも直面することになる。ここでの課題をクリアできたとしても、高校や大学に入学後、再び不登校に陥り結果的に休学や退学を余儀なくさせられることは多い。

このように考えれば、学校が不登校問題に対して取り組むべき課題は、早期発見と早期対処（相談及び他機関へのリファー）と併せて、不登校の予防を意図した対処にあると言えよう。それゆえ、今回は、不登校に対する校内体制の機能を充実するために具体例を挙げて何が大切かを論じてきた。

なお、ここで取り上げた事例は、すでに終結したものであり、掲載するに当たり個人が特定されることのないよう十分な配慮を行った。

文献

- 浅川 南 2008 友人関係が小学生の登校意欲に及ぼす影響に関する研究 日本教育心理学会第50回総会発表論文集,p35.
青木泰明 2006 文化的実践としての不登校Ⅲ—不登校経験というサポート戦略—日本教育社会学会大会発表要旨集録 58 pp. 157-158.
Bernstein, G.A.,Svingen, P.H., & Garfinkel, B.D.1990 School phobia:Patterns of functioning. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*,29,pp.24-30.
Blagg, N. 1987. *School phobia and its treatment*. New York : Croom Helm.
Burke,A.E., & Silverman, W.K. 1987 The prescriptive treatment of school refusal. *Clinical Psychology Review*, 7, pp.353-362.
Chazan, M. 1962 School phobia. *British Journal of Educational Psychology*,32,pp.209-217.
学校不適応対策協力者会議 1992 登校拒否（不登校）問題について 文部省
Hersov, L.1985. School refusal. In M. Rutter & L.Hersov(Eds.) *Child and adolescent psychiatry*, 1.137-145.
石橋知佳 2005 不登校生徒に対する再登校へ向けた支援の検討 吉備国際大学大学院心理学研究科修士論文
伊藤秀樹 2006 専門高校における登校意欲の形成メカニズム—『ブラックボックス』の鍵は職業的レリバレンス 第6回

- SPSS Open House 研究奨励賞ポスターセッション展示論文
Johnson, A.M., Falstein, E.I., Szurec, S.A. 1941 School phobia. *American Journal of Orthopsychiatry* 11, pp.702-711.
金子 保 1992 担任と親とでなおす登校拒否—登校拒否（不登校）の理解と治療教育相談プログラム— 田研出版
Kearney, C.A., Eisen, A.R., & Silverman, W.K.1995. The legend and myth of school phobia. *School Psychology Quarterly*, 10, pp.65-85.
北区不登校対策検討委員会 2006 北区不登校対策検討委員会報告書 北区教育委員会事務局
Klein,E.1949 The reluctance to go to school. *The psychoanalytic study of the child*.1.pp.263-79.
小泉英二編著 1973 登校拒否 学事出版
小泉英二編著 1980 続登校拒否—治療の再検討—
Last, C.G.,& Strauss, C.C. 1990. School refusal in anxiety-disordered children and adolescents. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*.29,pp.31-35.
Last, C.G. 1992. Anxiety disorders in childhood and adolescence. In W.N.Reynolds(Ed.), *Internalizing disorders in children and adolescents* (pp.61-106). New York : Jhon Wiley & Sons.
内外教育 1993 登校拒否児童・生徒の実態調査 時事通信社
内外教育 2007～2010 学校基本調査速報①不登校 時事通信社
小野 修 1992 不登校児から学ぶ—子ども・親・教師の成長のみちすじ—黎明書房
小野 修 1995 不登校における教師と学校の問題 互学資料3
Tambirajah, K.J., Grandison, K.J., & Hayes, L. 2008. *Understanding school refusal*. London and Philadelphia : Jessica Kingsley Publishers.
寺田道夫 1992 仮称 登校拒否への対処記録 No.2 非刊行物.
寺田道夫 1993a 子どもの登校意欲を促すよい関係づくり～登校拒否指導教員として～東海心理学会第42回大会発表論文集 .p.19.
寺田道夫 1993b 仮称 登校拒否への対処記録 No.2 非刊行物
寺田道夫 1994a 登校意欲を促すための早期対処のありかた～登校拒否指導教員の立場から～東海心理学会第43回大会発表論文集 .p.25.
寺田道夫 1994b 仮称 登校拒否への対処記録 No.2 非刊行物.
寺田道夫 1995 登校意欲を促すための早期対処のありかた2～学校における教育相談室の窓から～東海心理学会第44回大会発表論文集 .p.44.
寺田道夫 1996a 登校拒否への対処 ～良い関係を求めて～非刊行物 .
寺田道夫 1996b 登校意欲を促すための早期対処のありかた3～学校で居場所を作る～東海心理学会第45回大会発表論文集 .p.61.
寺田道夫 1997 登校意欲を促すための早期対処のありかた4～長期化する事例への学期に応じた対処～東海心理学会第46回大会発表論文集 .p.49.
寺田道夫 1998 登校意欲を促すための早期対処のありかた5～学校との良い関係～東海心理学会第47回大会発表論文集 .p.29.
寺田道夫 1999 登校意欲を促すための早期対処のありかた6～しほり期の子供への対応～東海心理学会第48回大会発表論文集 .p.44.
寺田道夫 2000 登校意欲を促すための早期対処のありかた7～保護者（家庭）と学校との良い関係づくりの回復を核にして～

東海心理学会第 49 回大会発表論文集 .p.37.

寺田道夫 2001 登校意欲を促すための早期対処のありかた 8
～保護者と学校との良い関係づくりのために～東海心理学会第
50 回大会発表論文集 .p.36.

寺田道夫 2002 登校意欲を促すための早期対処のありかた 9
～子供の心が解ることで良い関係づくりは生まれる～東海心
理学会第 51 回大会発表論文集 .p.42.

寺田道夫 2003 登校意欲を促すための早期対処のありかた 10
～キーパーソンを支えるための力動的相談態勢～東海心理学会
第 52 回大会発表論文集 .p.15.

寺田道夫 2004 登校意欲を促すための早期対処のありかた 11
～力動的相談態勢を活かす～東海心理学会第 53 回大会発表論
文集 .p.27.

寺田道夫 2005a 不登校への対処～学校における早期対処の
あり方 東海女子大学紀要第 25 号 pp.79-94.

寺田道夫 2005b 登校意欲を促すための早期対処のありかた 12
～校内の力動的相談態勢を活かす～東海心理学会第 54 回大会
発表論文集 .p.44.

寺田道夫 2006a 不登校児への対処Ⅱ～心理力動的接近～ 東
海女子大学紀要第 26 号 pp.135-189.

寺田道夫 2006b 登校意欲を促すための早期対処のありかた 13
～力動的相談態勢を活かす～東海心理学会第 55 回大会発表論
文集 .p.27.

寺田道夫 2007 登校意欲を促すための早期対処のありかた 14
～学校でできること～東海心理学会第 56 発表論文集 .p.24.

寺田道夫 2008 登校意欲を促すための早期対処のありかた 15
～学習意欲と登校意欲の関連～東海心理学会第 57 発表論文
集 .p.38.

寺田道夫・瀬見井千尋 2009 登校意欲を促すための早期対処
のありかた 16 ～学校登校意欲の発現を促すための基礎的条
件 小学生～ 東海心理学会第 58 回発表論文集 .p.31.

寺田道夫 2010a 不登校への対処Ⅶ ～不登校問題史の研究
の夜明け～ 東海学院大学紀要第 3 号 pp.135-150.

寺田道夫 2010 登校意欲を促すための早期対処のありかた 17
～中学生における学習意欲と登校意欲の関連～ 東海心理学会
第 59 回発表論文集 .p.29.

陳怡婷 2008 台湾における小学生の登校意欲に関する研究
東海心理学会第 57 発表論文集 .p.47.

吉村英雄 1988 登校拒否の経過モデル 教育心理.7 日本
文化科学社

資料1 相談記録用紙		成長の過程 (● ネガティブな言動 ☆ ポジティブな言動)		記録者氏名 ()																																																																																																																																																																																																																																																																																															
所属 4年 組 番 氏名 A 年 月 生まれ 住所 連絡先 家族構成 (一部のみ記載) CL ○ ○ IP 生育歴 乳児期: 入院 幼児期: 反抗期なく素直 小学 (低): 失敗回避・周囲に敏感 家から出ない (一部のみ記載)		<table border="1"> <thead> <tr> <th>月</th> <th>家庭場面での子どもの様子</th> <th>学校場面の出来事</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>4</td> <td>●学校のことを話さない ●姉とよく喧嘩 ●登校を渋り始める ●担任への恐怖心を訴える</td> <td>●怒られてばかり ●授業中に間違え担任叱責</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>●身体症状やトイレで嘔吐 ☆母親にべったり、一緒に寝る ☆「何でもするから行かせないで」 7,ぐずぐずして起きない● 1,朝、頭痛、腹痛●,後はケロリ☆ 2,登校時間前にイライラ● 3,友達を迎え出ない、隠れる● 4,放課後元気☆ 5,休日元気☆ 6,夜になると登校の気配を見せる● 7,教科書・鞆をかたづけしている● 8,勉強のことを気にする● 9,「先生が嫌」という☆ 10,少しの失敗を気にする● 11,完全にしない気が済まない● 12,家でわがままが出る☆ 13,勉強をする気がない☆</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>7</td> <td></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>		月	家庭場面での子どもの様子	学校場面の出来事	4	●学校のことを話さない ●姉とよく喧嘩 ●登校を渋り始める ●担任への恐怖心を訴える	●怒られてばかり ●授業中に間違え担任叱責	5	●身体症状やトイレで嘔吐 ☆母親にべったり、一緒に寝る ☆「何でもするから行かせないで」 7,ぐずぐずして起きない● 1,朝、頭痛、腹痛●,後はケロリ☆ 2,登校時間前にイライラ● 3,友達を迎え出ない、隠れる● 4,放課後元気☆ 5,休日元気☆ 6,夜になると登校の気配を見せる● 7,教科書・鞆をかたづけしている● 8,勉強のことを気にする● 9,「先生が嫌」という☆ 10,少しの失敗を気にする● 11,完全にしない気が済まない● 12,家でわがままが出る☆ 13,勉強をする気がない☆		6			7			○相談の経過の記録 相談の形態 ・電話相談: デ ・家庭訪問: カ ・来談: ラ ・学校で相談: ソ ・相談室: 相 ・その他: 記入 6/11 デ 相談依頼 6/12 ソ 状態像の説明, 相談態勢づくり 6/17 相 母親面接: 状態像・親の不安・ 相 学校批判・生育歴・家族力動 6/24 相 母親面接: 対応への不安・葛藤 6/26 相 母子面接 7/4 相 母子面接 7/8 相 母親面接 ○再登校後の子どもの様子など 7/16 経過報告 7/25 母親より様子報告 8/4 夏休みの対応検討 8/12 登校し活動 8/27 両親が登校に不安 8/29 登校・級友と遊ぶ 9/1 登校・途中で引き返す 9/11 登校・校門到着 9/14 登校・給食 9/17 朝親と口論 9/18 8:30 登校, 友と遊ぶ 9/22 教室で折り紙 クラブ参加 9/24 社会見学母親随伴 9/27 父, 友とサクリグ (一部の記録のみ記載)																																																																																																																																																																																																																																																																																
月	家庭場面での子どもの様子	学校場面の出来事																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
4	●学校のことを話さない ●姉とよく喧嘩 ●登校を渋り始める ●担任への恐怖心を訴える	●怒られてばかり ●授業中に間違え担任叱責																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
5	●身体症状やトイレで嘔吐 ☆母親にべったり、一緒に寝る ☆「何でもするから行かせないで」 7,ぐずぐずして起きない● 1,朝、頭痛、腹痛●,後はケロリ☆ 2,登校時間前にイライラ● 3,友達を迎え出ない、隠れる● 4,放課後元気☆ 5,休日元気☆ 6,夜になると登校の気配を見せる● 7,教科書・鞆をかたづけしている● 8,勉強のことを気にする● 9,「先生が嫌」という☆ 10,少しの失敗を気にする● 11,完全にしない気が済まない● 12,家でわがままが出る☆ 13,勉強をする気がない☆																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
6																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
7																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
出席状況 (○出席 ●欠席 △登校し途中で引き返す 相=相談室)																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">6月</th> <th colspan="4">7月</th> <th colspan="4">8月</th> <th colspan="4">9月</th> <th colspan="4">10月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1月</td><td>○</td><td>8月</td><td>●</td><td>15月</td><td>●</td><td>22月</td><td>●</td><td>29月</td><td>●</td><td>6月</td><td>●</td><td>13月</td><td>●</td><td>20月</td><td>●</td><td>27月</td><td></td><td>3月</td><td></td><td>10月</td><td></td><td>17月</td><td></td><td>24月</td><td></td><td>31月</td><td></td><td>7月</td><td>△</td><td>14月</td><td>○</td><td>21月</td><td>○</td><td>28月</td><td>○</td><td>5月</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>2火</td><td>●</td><td>9火</td><td>●</td><td>16火</td><td>●</td><td>23火</td><td>●</td><td>30火</td><td>●</td><td>7火</td><td>●</td><td>14火</td><td>●</td><td>21火</td><td>●</td><td>28火</td><td></td><td>4火</td><td></td><td>11火</td><td></td><td>18火</td><td>○</td><td>25火</td><td></td><td>1火</td><td>△</td><td>8火</td><td>△</td><td>15火</td><td>○</td><td>22火</td><td>○</td><td>29火</td><td>○</td><td>6火</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>3水</td><td>○</td><td>10水</td><td>●</td><td>17水</td><td>●</td><td>24水</td><td>●</td><td>1水</td><td>●</td><td>8水</td><td>●</td><td>15水</td><td>相</td><td>22水</td><td></td><td>29水</td><td></td><td>5水</td><td></td><td>12水</td><td>○</td><td>19水</td><td></td><td>26水</td><td></td><td>2水</td><td>△</td><td>9水</td><td>△</td><td>16水</td><td>○</td><td>23水</td><td>○</td><td>30水</td><td>○</td><td>7水</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>4木</td><td>●</td><td>11木</td><td>●</td><td>18木</td><td>●</td><td>25木</td><td>●</td><td>2木</td><td>●</td><td>9木</td><td>●</td><td>16木</td><td>●</td><td>23木</td><td></td><td>30木</td><td></td><td>6木</td><td></td><td>13木</td><td></td><td>20木</td><td>○</td><td>27木</td><td></td><td>3木</td><td>△</td><td>10木</td><td>△</td><td>17木</td><td>○</td><td>24木</td><td>○</td><td>1木</td><td>○</td><td>8木</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>5金</td><td>●</td><td>12金</td><td>●</td><td>19金</td><td>●</td><td>26金</td><td>相</td><td>3金</td><td>●</td><td>10金</td><td>●</td><td>17金</td><td>●</td><td>24金</td><td></td><td>31金</td><td></td><td>7金</td><td></td><td>14金</td><td></td><td>21金</td><td></td><td>28金</td><td></td><td>4金</td><td>△</td><td>11金</td><td>△</td><td>18金</td><td>○</td><td>25金</td><td>○</td><td>2金</td><td>○</td><td>9金</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>6土</td><td></td><td>13土</td><td></td><td>20土</td><td></td><td>27土</td><td></td><td>4土</td><td>相</td><td>11土</td><td>相</td><td>18土</td><td></td><td>25土</td><td></td><td>1土</td><td></td><td>8土</td><td></td><td>15土</td><td></td><td>22土</td><td></td><td>29土</td><td></td><td>5土</td><td></td><td>12土</td><td></td><td>19土</td><td></td><td>26土</td><td></td><td>3土</td><td></td><td>10土</td><td></td> </tr> <tr> <td>7日</td><td></td><td>14日</td><td></td><td>21日</td><td></td><td>28日</td><td></td><td>5日</td><td></td><td>12日</td><td></td><td>19日</td><td></td><td>26日</td><td>大</td><td>2日</td><td></td><td>9日</td><td></td><td>16日</td><td></td><td>23日</td><td>○</td><td>30日</td><td></td><td>6日</td><td></td><td>13日</td><td></td><td>20日</td><td></td><td>27日</td><td></td><td>4日</td><td></td><td>11日</td><td></td> </tr> </tbody> </table>						6月				7月				8月				9月				10月				1月	○	8月	●	15月	●	22月	●	29月	●	6月	●	13月	●	20月	●	27月		3月		10月		17月		24月		31月		7月	△	14月	○	21月	○	28月	○	5月	○	2火	●	9火	●	16火	●	23火	●	30火	●	7火	●	14火	●	21火	●	28火		4火		11火		18火	○	25火		1火	△	8火	△	15火	○	22火	○	29火	○	6火	○	3水	○	10水	●	17水	●	24水	●	1水	●	8水	●	15水	相	22水		29水		5水		12水	○	19水		26水		2水	△	9水	△	16水	○	23水	○	30水	○	7水	○	4木	●	11木	●	18木	●	25木	●	2木	●	9木	●	16木	●	23木		30木		6木		13木		20木	○	27木		3木	△	10木	△	17木	○	24木	○	1木	○	8木	○	5金	●	12金	●	19金	●	26金	相	3金	●	10金	●	17金	●	24金		31金		7金		14金		21金		28金		4金	△	11金	△	18金	○	25金	○	2金	○	9金	○	6土		13土		20土		27土		4土	相	11土	相	18土		25土		1土		8土		15土		22土		29土		5土		12土		19土		26土		3土		10土		7日		14日		21日		28日		5日		12日		19日		26日	大	2日		9日		16日		23日	○	30日		6日		13日		20日		27日		4日		11日	
6月				7月				8月				9月				10月																																																																																																																																																																																																																																																																																			
1月	○	8月	●	15月	●	22月	●	29月	●	6月	●	13月	●	20月	●	27月		3月		10月		17月		24月		31月		7月	△	14月	○	21月	○	28月	○	5月	○																																																																																																																																																																																																																																																														
2火	●	9火	●	16火	●	23火	●	30火	●	7火	●	14火	●	21火	●	28火		4火		11火		18火	○	25火		1火	△	8火	△	15火	○	22火	○	29火	○	6火	○																																																																																																																																																																																																																																																														
3水	○	10水	●	17水	●	24水	●	1水	●	8水	●	15水	相	22水		29水		5水		12水	○	19水		26水		2水	△	9水	△	16水	○	23水	○	30水	○	7水	○																																																																																																																																																																																																																																																														
4木	●	11木	●	18木	●	25木	●	2木	●	9木	●	16木	●	23木		30木		6木		13木		20木	○	27木		3木	△	10木	△	17木	○	24木	○	1木	○	8木	○																																																																																																																																																																																																																																																														
5金	●	12金	●	19金	●	26金	相	3金	●	10金	●	17金	●	24金		31金		7金		14金		21金		28金		4金	△	11金	△	18金	○	25金	○	2金	○	9金	○																																																																																																																																																																																																																																																														
6土		13土		20土		27土		4土	相	11土	相	18土		25土		1土		8土		15土		22土		29土		5土		12土		19土		26土		3土		10土																																																																																																																																																																																																																																																															
7日		14日		21日		28日		5日		12日		19日		26日	大	2日		9日		16日		23日	○	30日		6日		13日		20日		27日		4日		11日																																																																																																																																																																																																																																																															
登校の兆し A 対学校: ①学校情報に関心 ②友達・担任の電話に進んで出る ③友達と雑談し戸外で遊ぶ ④担任と放課後学校で会える B 対家庭: ①会話量が全体的に増す ②過去の学校の出来事を話題にする ③行事や授業の話をする ④将来のことを口にする ⑤「学校行こうか」「みんなどうしているかな」という C 生活: ①通常の生活リズム ②笑顔, 生き生きした言動 ③食欲増進 ④散髪・制服にアイロン ⑤自分の考えや欲求表現 D 家族: ①本人, 家族の精神的安定 ②家族の意見が素直に出る ③両親の親密化 ④温かな家族的雰囲気 (この事例については事前に当事者の了解が得てあり、詳細な記載は省略した。)																																																																																																																																																																																																																																																																																																			